The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パスカルの『パンセ』とリベルタン
Author(s)	赤木, 昭三
Citation	Gallia. 2015, 54, p. 11-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パスカルの『パンセ』とリベルタン*

赤木　昭三

はじめに

パスカルは、ご存じのように、その死の6年前にあたる1656年夏頃から、不信仰者を説得するための『キリスト教のアポロジー（弁護）』という大著を計画し、晩年の6年間、その執筆に心魂を傾けましたが、この大作は、未完と呼ぶにも程遠い段階で作者の死によって中断され、一千近くのメモ、あるいは下書きの断片の集積として残されました。その総体が、のちに『パンセ』と呼ばれた作品であることも、またご存じのとおりであります。

このような作品の、このような断片的な形態を、作者によって意図されたスタイルと受け取り――これはパスカルの時代には考えられもしなかった作品の形式ではありますが、作者が思い付くままに、自由に、気ままに、断片的に、その思索を書き付けた随想集のたぐいと見なして、とくに前半の人間論の部分を中心に、その見事と言うほかない魅力ある表現、その深刻な思想に、あるいは共感し、あるいは反発しながら、全く自由に作者と対話するというのも、なかなか捨て難い読み方ではありますが、しかしこの作品を、少しでも作者の考えや意図に即して、できる限り作者の側に立って理解しようとするならば、これが、あくまでも『キリスト教のアポロジー』のための断片群であることを銘記すべきでありますし、またそこから、神について、信仰について、世界について、あるいは人間と、その社会についてのパスカルの思想を読み取ろうとする場合でも、それがパスカルの生の思想の直截な表現であるよりも、『キリスト教のアポロジー』というプリズムを透して現出したものであることを忘れるべきではないと思われます。

ところで、『パンセ』をこのように、『キリスト教のアポロジー』として読み解こうといたしますと、当然、この『アポロジー』が、誰のために書かれたかが問題にならざるをえません。一体パスカルは、誰のためにキリスト教を弁護し、一体どんな相手を説得して、できれば信仰に導きたいと考えたのでしょうか。というのも、不信仰の人は、17世紀には「リベルタン」と呼ばれることが多かったのでありますが、これからお話ししますように、この時代には実に多種多様なリベルタンがおりまして、しかも当時は、宗教を否定したり、疑ったりするようなことを公々然と言ったり、書いたりしようものなら、よほど身分の高い貴族か、あるいは、そういう貴族に保護された人でないかぎり、たちまちひっぱられて、命

＊　初出：『思想』806号、岩波書店、1991年8月、124-143頁。本論文の本誌への転載を許諾された岩波書店に感謝申し上げる。なお、以下の注はすべて赤木先生ご自身によるものである。転載に際し、年号、『パンセ』の断章番号、参考文献のページ番号などはアラビア数字に改めた。また、明らかな誤植は訂正した。

さえ落とした人もいる。だから、そういう人が、自分のはっきりした考えを、はっきり書き残した例は、きわめて限られたものである。つまり『パンセ』の方は明確な目標を持った作品であるのに、その対象としている相手があまりはっきりしないわけで、これは大へん困ったことであります。

何故困るかと申しますと、まず相手がはっきりしないと、それをターゲットにした『パンセ』という作品の理解や解釈が曖昧になるおそれがありまして、これは大へん具合のわるいことである。つぎには、パスカルは、作品の「有効性」というものをつねに意識的に考え、重視した人であり、有効に相手を説得するための「レトリック」に大へん気を使い、苦心した人であります。しかるにパスカルが、どんな人を相手にしたかがわからないのでは、パスカルのレトリックの評価、文学者としての価値の判定を正確に行うことが難しいであろうと思われます。さらに、リベルタンを研究している私のような人間からいたしますと、パスカルがどんなタイプのリベルタン、どんな思想の持ち主であるリベルタンをターゲットにしたかがわかれば、17 世紀のさまざまなリベルタンの評価、その重要度の比重の付け方という点でも大いに参考になります。このようないろんな意味で、『パンセ』が対象としている読者というテーマは、なかなか面白い問題をいくつも含んでいると言えますので、ここで取り上げることにした次第であります。もちろんこれは面白いけれども、大へん大きな、難しい問題で、まだまだこれから研究を積み重ねる必要があり、そんなにやすやすと決定的な結論がすぐに出せるとは思われません。今日は、この問題提起と、暫定的な一つの結論のようなものを提示するにとどめたいと思います。

一　17 世紀のリベルタン

ところで幸いなことに、『パンセ』の相手であるリベルタンの研究は、ここ百年の間にかなり進みまして、いろんなタイプのリベルタンの風貌や、その隠れた思想などが、相当にはっきりと分かってまいりました。それを大別すると――私が何年かまえに、平凡社の百科事典に書いたものを参考にしていただきたいのですが、およそ次の四つくらいのグループに分けられるのではないかと思います[1)]。

まず第一のグループは、17 世紀初頭のテオフィル・ド・ヴィヨーという詩人やその弟子達のグループでありまして、これは思想的には、イタリア・ルネサンスの思想の影響を強く受けた一種のアニミズム、宇宙全体に一つの霊魂が貫流して、宇宙全体が、生きた、一つの、大きい「動物」であると考えて、個々の人間の霊魂不滅を否定し、また星辰、すなわち宿命、必然にもてあそばれる人間のペシミズムを歌って、神の摂理を否定した人たちであります。そして、このグループのしんがりは、パスカルの同時代のシラノ・ド・ベルジュラックという作家でありまして、この人はパスカルの『パンセ』のなかの有名な「賭け」の論理を――ま

1）『平凡社大百科事典』の「自由思想家」の項目を参照のこと。なお 17 世紀のリベルタン全体について、さらに詳しくは、次の拙論を参照のこと。「十七世紀のリベルタンとデカルト思想」上、中、下、『思想』1980 年 5 月号、6 月号、7 月号。

だ『パンセ』が書かれる以前ですから、それを読んだはずもないのでありますが——まるでこれを予め予想していたような反論を作品の中に残しておりますが、しかしパスカルの方はもちろんそのことを知らなかったでしょうし、また『パンセ』を書きながら、このグループを念頭に置いた形跡は全くありません。全くの無視であります。そしてそれも当然のことでありまして、パスカルの近代的な科学者としての新しい自然観からすれば、彼らの思想は、一顧にも値しないアナクロニックなものに見えただろうと思われますが、しかし実は不思議なことに、この時代遅れと見えた思想が、17 世紀末から 18 世紀にかけて、デカルト・ブームのすぎたあとに、ふたたび形を変えて復活いたします。しかしこれは、パスカルには全く関わりのないことではあります。

第二のグループは、私が「人文学者リベルタン」と名づけた人たちでありまして、17 世紀前半に活躍した人文学者、ユマニストで、驚くべき博識でもって、古今のあらゆる学説から新大陸の見聞などまで引用しながら、あるいは人間の霊魂不滅について、あるいは奇跡や予言について、あるいは神の存在にいたるまで、疑いや否定の論法を展開しております。共通の思想的基盤は広い意味での懐疑主義で、その思想的リーダーは、当時デカルトと対抗していた哲学者のガッサンディという人であります。このグループとパスカルとの関係については、たとえばパスカルのお父さんの親友で、パスカルとも親しかったル・パイユールという人がいて、新しい科学者であると同時に詩人でもあり、メルセンヌの死後、その有名な科学アカデミーを引きついだ人でありますが、この人がまた「人文学者リベルタン」とも関係のあったことが知られております。その他、パスカルとこのグループとの人的なつながりは、しばしば指摘されているところであります[2)]。

第三のグループは、17 世紀の中ごろから後半にかけて見られた「オネットム・リベルタン」でありまして、パスカルが 1653 年頃、いわゆる社交時代に知り合ったといわれる社交界の紳士のリベルタン、シュヴァリエ・ド・メレやミトンはここに入ります。このグループを一言で評しますと、エピキュリヤンの無関心派でありますが、メレなどは、思想的にはガッサンディに近くて、アンチ・デカルト派でもあります[3)]。このグループとパスカルとの関係については、またのちに述べることにいたします。

第四のグループは、フォントネルのようなデカルト派のリベルタンでありまして、理性によって——宗教をも含めて——一切を批判し、不合理なものをすべて虚偽であるとして退ける合理主義者であります。しかしこういうタイプがあらわれるのは、パスカルの死後の 17 世紀末でありますから、これは一応除外いたしま

2）たとえば、パスカルは 1646 年秋に、ルアンで、トリチェリの真空実験に成功したが、そのとき実験のイニシアチヴをとったピエール・プチはガッサンディの友人でもあった。つぎの拙論を参考のこと。「科学者リベルタンの発生？——ピエール・プチの場合」(1)、『フランス十七世紀文学』第 2 号、フランス十七世紀文学研究会発行、1967 年、4 頁。またパスカルの青年時代の親友で、熱烈なジャンセニストであるとともに、物理学者でもあったアドリアン・オーズーもガッサンディをよく知っていた。下記を見よ。Pascal, *Œuvres complètes*, éd. Jean Mesnard, Desclée de Brouwer, tome II, 1970, pp. 720-727.

3）前掲拙論「十七世紀のリベルタンとデカルト思想」中、『思想』103 頁。

す。

といたしますと、17 世紀リベルタンの今挙げました四つのグループのうち、第二の「人文学者リベルタン」と第三の「オネットム・リベルタン」、この二つがパスカルに関係がありそうだということになります。

二　『パンセ』の対象としてのリベルタン

ところで、この点に関するこれまでの説では――そしてこれは現在では、ほぼ定説といってもよいものでありますが――『アポロジー』の目標としたリベルタンは、第二のグループの「人文学者リベルタン」ではなくて、第三の「オネットム・リベルタン」だということになっております。この説を詳しく展開したのはパリ・ソルボンヌ大学におられたパンタール教授の「パスカルとリベルタン」という論文で[4]、この論文は 1962 年に発表されましたが、現代におけるパスカル研究の第一人者で、同じくパリ・ソルボンヌ大学教授であったジャン・メナール先生の、その後で書かれた本の中でも、ほぼこの説が踏襲されております[5]。パンタール先生は、第二のグループの「人文学者リベルタン」について、大へん優れた学位論文を書いた人で[6]、「人文学者リベルタン」のことは、誰よりもよく知っている人であります。

そのパンタール教授の説をごく簡単に申しますと、『パンセ』の中には「人文学者リベルタン」が展開した宗教批判の細かい議論の片鱗は確かに見られる。たとえば霊魂の物質性の議論や、キリストの復活、あるいは処女マリアが子供を産むことの不合理性、奇跡の批判、また聖書の中の予言と古代ギリシア、ローマの神託との比較、あるいは旧約聖書の記述と中国の古い年代記との矛盾などがそれであるが、しかしそれらは極めて手短かに触れられているだけだし、またこれにたいするパスカルの批判も極めて簡単で、議論にもなっていない。これではとうてい、この博学な学者達を納得させることは出来ないだろう。だから『パンセ』は、こういう人文学者を対象にして書かれたものではないと思われる。

一方、『パンセ』のなかに生き生きと登場するのは、宗教の否定者、批判者というよりも、信仰について関心のない、社交界の「オネットム・リベルタン」である。一例だけ挙げますと、パスカルの「賭け」を扱う有名な断章（ラフュマ版第 418 番）の中でパスカルは、こんなふうなことを言っている。神有りと賭けるほうがずっと有利なんだよ。その結果、賭けた通りに神が存在したら大へんなもうけものだし、もしかりに神が無かったとしても、失うのは有限な、取るに足りないものだ。それに、神有りの方に賭けて、キリスト教の教えるような、立派な正しい生活をするとしよう。そしてその結果、かりに神が無かったとしても、失うものは、実は何もないじゃないか。というのも、そういう正しい生活をすれば、君は、立派な「オネットム」として世間で尊敬されるだろうから、というふうな

4）René Pintard, « Pascal et les libertins », in *Pascal présent*, Le Livre du Tricentenaire, Bussac, Clermont-Ferrand, 1962, pp. 104-130.
5）Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, SEDES, 1976.
6）René Pintard, *Le Libertinage érudit dans la première moitié du XVII*e *siècle*, Boivin, 1943, 2 vol.

ことを言っている。ここに見られる論争の相手は、明らかにメレやミトンのような社交界に生きる社交人である。

以上がパンタールさんの主張でありますが、メナールさんはさらにこれを補足して、パスカルはメレやミトンといった、自分の周辺にいる「オネットム・リベルタン」だけではなく、これをいわばプロトタイプとして、そこにモンテーニュをも付け加えた。といっても、あくまでもパスカルが理解したモンテーニュ、すなわち信仰には無関心で、いい加減に、怠惰に、柔弱に人生を送り、心乱されずに、心静かに、死を待つといったモンテーニュ像でありますが、これをそこに加えた。さらにまたそこに、例えばモリエールの描いた『ドン・ジュアン』（ドン・ファンのこと）のように、アグレシヴに散々宗教の悪口は言うけれども、実はただ虚勢を張っているだけのリベルタンをも含めて、普遍的な一つの「オネットム・リベルタン」のタイプを作り上げたのだと考えますが、いずれにしても先程の第三のタイプ、すなわち社交界の紳士のリベルタンであることに変わりありません[7)]。

しかしこの定説には、いくつかの疑問を投げかけることができるように思います。まず 17 世紀前半の学者グループのキリスト教批判の細かい議論を、パスカルは、ほとんど正面から取り上げて反論していない。だから『アポロジー』の相手は彼らではないのだ、という点について申しますと、これにたいしては、われわれは、つぎのように答えることができるのではないかと思います。そして、これはメナール先生もすでに指摘しておられることなのですが[8)]、なぜパスカルは一々細かく彼らに反論しなかったかというと、相手と同じ土俵の上に立って細かく反論すれば、相手の手に乗るだけであって、またきりがない。そうではなくてパスカルは、もっと根本的なところで、彼らの立っている土俵全体をひっくり返そうとしたのだ。つまり信仰は理性の問題であるよりも、心の問題である。そしてそういう新しい地点に立てば、彼らの細かい批判は一切意味を失う。そのような新しい視点を彼らに示そうとしたのだ、という解釈であります。だとすれば、「人文学者リベルタン」が、パスカルの射程に全く入っていなかったと決めつけてしまうことは出来ないだろうと思われます。

またご存じのように『パンセ』には、執拗なまでに理性にたいする批判が述べられております。すなわち人間の理性という認識の道具には限界がある。自然を探求するときでも理性だけでは駄目であって、このためには必ず実験というものをやらなければならない。ましてや自然を超えた信仰の世界においては、理性は全く無力なのだということを繰り返し述べております。しかし一方、社交界のオネットム・リベルタンには、先にも申しましたように、徹底した合理主義者はいない。そのほとんどはアンチ・デカルトで、人間の理性の力の限界を認める点では、むしろパスカルと共通しているといえます[9)]。とするとパスカルは、一体だれ

7）Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, pp. 120-129.
8）*Ibid*. p. 124.
9）註（3）に掲げた拙論の 103-107 頁を参照のこと。

にたいして、このような理性批判を展開したのかということになります。

さらには――これからお話するように――パスカルは、『キリスト教のアポロジー』という本については、かなりはっきりした構想というか、プランを立てて、全体の章立て――27 ないし 28 の章立てまで考えていたことが、現在ではわかっております。ところが、この本の書かれた相手のリベルタンが、どんなリベルタンかを考える場合、この本のプランのことを、これまで誰も全く考慮したことが無かった。これは大へん不思議な気がいたします。この本のプランをよく調べたら、その背後に、この本のターゲットであるリベルタンの姿が浮かび上がってくるのではないか。それを一つやってみようというのが、今日の話の本題であります。

しかし、この本題に入る前には、まずパスカルの立てたこのプランについて――そんなものが一体あるのか、信用できるのかといった点について――若干御説明する必要があろうかと思います。そしてそれを説明するためには、その前に、まずパスカルの仕事ぶりや、パスカルの死後に残された『パンセ』の原稿の状態などのことから、ごく簡単にでもお話ししなければなるまいと思います。

三　『アポロジー』のプランについて（一）

パスカルが『パンセ』を書き始めたのは、はじめに申しましたように、死ぬ六年前の 1656 年夏頃と言われております。そして最後の六年間に、断続的にこれを書き続けていったのでありますが、どういうふうに書いていったかと申しますと、まず大きな紙にメモ的に書く。その紙の大きさは、13.5 センチ× 21.5 センチから、25 センチ× 38 センチまで、11 種類あったことが現在では知られております[10]。ただそれだけならば何ということもありませんが、パスカルはあるときに――そのあるときというのが一回か、複数回か、議論が分かれておりますが――ともかくあるときに、その紙を切って整理した。つまり紙に書かれたメモ、すなわち断章を読み直して、主題が変われば、そこでチョキチョキ切る。だからいくつかの断章が、切らないで、そのまま続いているのもあれば、一つの断章だけの細長い紙切れになってしまったのもあります。つぎに、その切った紙切れを整理して、いくつかのグループに分ける。そしてそのつぎに、針に糸を通して、その糸の端を結んでおいてから、整理した紙切れの左上の端につぎつぎと――一つのグループは一つの糸に、というふうに――その糸を通していく。こうして全部通してしまうと、糸のもう一方の端も結んでしまって、ばらけないようにする。こうして出来上がった束をフランス語では liasse と申します。こういうものは、日本でも――この場合は糸ではなくて、こよりでありますが――私の子供の頃には、まだあったように思いますが、ともかく、こういう『パンセ』の束を、パスカルは死んだときに 61、ないしは 62 残したわけです。ただし束と言いましたが、実は、切らない大きい紙のままのものもあります。たとえば、有名な「賭け」について

10）詳しくは、下記を参照のこと。Pol Ernst, «La Dimension chronologique des Pensées», in *Cahiers de l'Association Internationale des Études Françaises*, n°. 40, mai 1988, p. 239.

の断章は、二枚の紙の裏表にぎっしり書いた上に、なおいくつか別の断章がついて、束にはなってないが、二枚の紙の裏表という、ひとつのまとまりになっております。それでこの頃は、束と呼ばないで、unité つまり unit と呼ばれることが多い。私もこれからは「ユニット」と呼ぶことにしますが、このように、パスカルが死んだ後には、『パンセ』の原稿は、61 ないし 62 のユニットに整理された形で残されたわけであります。

ただし、そのオリジナルな原稿そのものは、長い年月の間に順序が変わってしまいまして、現在では、『パンセ』の断章の分類や順序を考えるためには、ほとんど役に立ちませんが、幸いにも、その死の直後に近親の人などが集まって、残された原稿を、残された分類、順序のままに、コピーをとってくれた。そういう貴重なコピーが現在二種類残っておりまして、それぞれ第一写本、第二写本と呼ばれております。

ところで、この二つの写本には、面白いことに多少違ったところがあります。その異同をごく簡単に申しますと、61 ないし 62 あるユニットのうち、ほぼ前半の 27 のユニットは、その順序、含まれる断章、全く同じである。しかも、この 27 のユニットには、それぞれタイトルまで付けてありまして、第 1 章、Ordre「順序」（一種の「序論」）からはじまって、第 27 章は Conclusion「結論」で、これで完結したまとまりを作っている。事実、写本の方には、この 27 章のタイトルが一頁にまとめられた目次も入っております[11)]。

つぎに、残りの 34 ないし 35 のユニットについての、二つの写本の異同はどうかといいますと、

(1) まず第二写本のほうが、第一写本よりも、ユニットの数が一つだけ多くて、こちらのほうは、35 のユニットを含んでおります。ただし三つの断章だけで成り立った、小さなユニットであります。

(2) つぎに、それを除く 34 のユニットはというと、第一写本と第二写本において、

---

11) [1] Ordre
[2] Vanité
[3] Misère
[4] Ennui
[5] Opinions du peuple saines（*rayé*）
Raisons des effets
[6] Grandeur
[7] Contrariétés
[8] Divertissement
[9] Philosophes
[10] Le Souverain Bien
[11] A. P. R.
[12] Commencement
[13] Soumission et usage de la raison
[14] Excellence
[15] Transition
[15 bis] La Nature est corrompue
[16] Fausseté des autres religions
[17] Religion aimable
[18] Fondement
[19] Loi figurative
[20] Rabbinage
[21] Perpétuité
[22] Preuves de Moïse
[23] Preuves de Jésus-Christ
[24] Prophéties
[25] Figures
[26] Morale chrétienne
[27] Conclusion

それぞれのユニットの含む断章の数も、順序も変わらない。変わるのは、それぞれの写本におけるユニット自体の並べ方、順序であって、これは相当に違う。

以上のことから引き出せる結果はいくつもありますが、今のわれわれの問題に限って申しますと、全体で 61 ないし 62 のユニットのうち、後半の 34、ないし 35 は別といたしまして、少なくとも前半の 27 章に限っては、その内容も配列も、二つの写本で全く変わらないのだから、ここは動かない。しかも、さっき申しましたように、第 1 章の「順序」からはじまって、第 27 章の「結論」で、一つの完全なまとまりを作っている。これは『アポロジー』という本のプランであり、それを構成する章であると考えるほかあるまいと思われます。かつては、これに異論を唱えた人もありましたが、現在ではこのように一般に認められております。だから、この 27 の章と、それぞれの章の内容を追っていけば、パスカルが『キリスト教のアポロジー』という本をどういうものと考えていたかが、ほぼわかるというわけであります。

ただし、ほぼわかるというのであって、これが絶対に変わらない、決定的なものだとは言えないと思います。なぜかといいますと、この 27 章を考えて、そこへ多くの断章を分類したのは、死ぬ四年前の 1658 年の 5 月頃（あるいは、最近出ましたメナール先生編集の『パスカル全集』第三巻によれば、「1656 年春」）[12] であろうといわれております。そのころにパスカルがポール・ロワイアルの修道院で、自分が書こうとしている本について講演したことが知られている。その前後に立てたものであろう。そして、あとの 34 ないし 35 のユニットは、「奇跡」に関する三つのユニットのように、この時期以前に書かれたことがはっきりしているのもありますが、その多くはそれ以後に書かれて、分類されたものであろう。とすると、このプランはパスカルの死の四年前のものであって、それ以後、あるいは多少の修正を受ける可能性もありえただろうということであります。

つぎに、この 27 章に分類されなかった多くの断章を、どう考えるかという問題があります。そして、その断章の数は、27 章に収められた断章の数より多い。いま第一写本を基準にして、ラフュマ版というエディションで数えてみますと、382 対 447 です。そして昔は、これも 27 の章に分類出来るのだと、強引に分類してしまった人もいましたが、今ではこれほど大胆な人はおりません。しかしこれらをざっと見ますと、まずパスカルが雑多な断章を集めて、「雑録」と名付けたユニットや、これに類するユニットが九つもあります。そして、これらのユニットが『アポロジー』のプランに強い関連があるとは考えにくい。またユダヤ民族のことを扱ったユニットが五つ、予言を考えたユニットが六つというふうに、比較的大きなまとまりを作っているものがあり、そしてこの二つの場合は、これからお話ししますように、そのどちらもが 27 の章に入るか、これに関連があります。「表徴」を扱った、もう一つのユニットについても同様のことが言えます。このように見ますと、27 章よりも後で書かれたものが多いと思われる 34 のユニットを考慮に入れても、27 章のプランを根本的に大きく変えてしまうようなことはあるまいと

12）Pascal, *Œuvres complètes*, éd. Jean Mesnard, Desclée de Brouwer, tome III, 1991, p. 115.

思われます。こういうわけで、この 27 章の章立てが、『アポロジー』という本のプランを考えるために、非常に確実な資料であることはお分かりいただけたかと存じます。

四　『アポロジー』のプラン（二）

そこでいよいよ本論に入って、この 27 章とその内容についてお話しすることになりますが、今日はあまり時間もないので、ここではさまざまな解釈の是非を詳しく論じることはせず、諸家の意見を参考にしつつ[13]、私なりにまとめたものを、ごく簡単にお話しするにとどめたいと思います。そこで、まず先程の註（11）に引用した「目次」を、もう一度見ていただきたいのですが、この目次の左半分に 10 章、これにたいして右半分には 17 章のタイトルが書いてありまして、明らかに不規則であります。そしてこれは偶然ではなく、左が第一部の、いわゆる人間論、右が、それに続く第二部の、キリスト教の真理性の証明に当てられた部分であると考えられます。

まず第 1 章「順序」は『アポロジー』全体の序論であります。重要な断章を二つ取り上げたいと思いますが、まずラフュマ版第 6 番の断章によりますと、第一部は「神なき人間の悲惨」、第二部は「神と共にある人間の至福」であるという。これは、先に述べた第一部の 10 章と第二部の 17 章に、ほぼ当たるだろうと思われます。つぎに第 12 番の断章によりますと、もう少し詳しくなりまして、これによれば、まずキリスト教は理性に反した愚かなものではなく、人間をよく知っているから、「尊敬すべきもの」vénérable であることを示す。つぎにキリスト教は人間に真の幸福をもたらすものであるから、それが「愛すべきもの」aimable であることを示す。こうして、キリスト教が真実なら、どんなにいいだろうかと思うにいたった相手に対して、最後に、それが「真実」vrai であることを証明する。こういう順序が述べられております。これを先程の目次に当てはめますと、「尊敬すべきもの」であることを示すのが、第一部の第 2 章から第 7 章まで、「愛すべきもの」であることを示すのが、第 8 章から第 10 章まで、つづく第二部全体が、キリスト教が「真実」である事を示す部分に、おおよそ当たると思われます。以下、それを簡単に説明いたします。

第 2 章から第 5 章までの四章（「空しさ」、「悲惨」、「倦怠」、「現実の理由」）は原罪以後の人間の「悲惨」を、さまざまな面から、詳しく、徹底的に分析する部分であります。それは大別しますと、人間は真理に到達しようと望みながら、それが得られない。また幸福になりたいと望みながら、現実には大へん不幸である。そしてまた、社会に正義が実現することを望みながら、現実の社会を動かすものは、あらゆる意味の「力」である。この三つに分けられるかと思います。

つづく第 6 章「偉大」は、翻って、人間の「偉大」を説明いたします。パスカ

13）その主なものは以下の通りである。Jean Mesnard, *Pascal, l'homme et l'œuvre*, 5e édition, Hatier, 1967 ; Pol Ernst, *Approches pascaliennes*, Duculot, Gembloux, 1970 ; J. Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, SEDES, 1976 ; Anthony Pugh, «La Disposition des matières», in *Pascal. Thématique des Pensées*, édité par L. M. Heller et I. M. Richmond, Vrin, 1988, pp. 9-28.

ルによれば、人間はこのように「悲惨」でありながら、また同時に「偉大」でもある。なぜ「偉大」であるかといえば、さっきの説明をもう一度使いますと、人間は、ただただ悲惨であるというだけでなく、真理が得られないのに、それでも、どうしても真理を見たいと望まずにはいられない。また絶対に手の届かない幸福を願わないではいられない。またどこにも存在しない正義の実現を望まざるを得ない。パスカルによれば、これは人間の「偉大」を示すものであります。またここには「考える葦」という有名な言葉がすでに登場いたしまして（ラフュマ版第113番）、自分の悲惨を自覚すること、「考える」こと、「知る」ことに、人間の「偉大さ」を見る考えが、顕著に現れております。この点についてはまた後に触れます。

こうしてパスカルによれば、人間は、悲惨であると同時に偉大であり、しかもまた悲惨であればあるほど偉大であり、偉大であればあるほど悲惨である。このように相反し、相容れない二つの性質がからみあって、分かち難く存在するのが人間というものであって、そのどちらか一方を取り去ると、もはや人間が人間でなくなる、こういう人間の根本的な在り方をパスカルは、つぎの第7章のタイトルでありますが、「相反」Contrariétés と呼び、この怪物のような人間の状態を説明することができるのは、キリスト教の教え以外にないことを示すのであります。すなわちキリスト教の教えによれば、原罪以前の人間は、真理、すなわち神を直接に見、また真の幸福を享受していた。しかし原罪以後、人間の本性は根底的に堕落し、歪み、現在の人間に見られるような悲惨なものになってしまった。しかしその悲惨な現在の人間の中にも、なお過去の偉大さの痕跡は消えずに残っている。人間の偉大と悲惨の共存、「相反」は、このようにして説明されるのである。ただしこの段階では、この説明は、まだ仮設として示されるにすぎないのでありまして、キリスト教の教えが真に証明されるのは、第二部を待たねばならないということになります。

以上で、キリスト教は、人間をよく知っているから「尊敬すべきもの」であることを示す部分が終わりまして、つづく三章は、キリスト教が、人間に真の幸福を与えるものであるから、「愛すべきもの」であることを示す部分に当たります。ここでは、パスカルは人間の真の生き方をよく考え、真の幸福を模索した哲学の代表として、エピキュリズムとストイシズムを取り上げ、第8章「気晴らし」では前者を、第9章「哲学者達」では後者を批判し、第10章「最高善」では、キリスト教のみがイエス・キリストによる救いを説いて、人間に真の幸福に到る道を示しているのだということを、あらためて確認しております。

ここで第一部が終わり、つぎに、キリスト教が「真実」であることを証明する第二部に入ります。まず第11章「A. P. R.」は、À Port-Royal（ポール・ロワイアルにて）の意味であるとされておりまして、これはパスカルが1658年の春頃に、ポール・ロワイアルでおこなったとされている、「キリスト教のアポロジー」についての講演に関連があるだろうと見られておりますが、この章は、いわば第二部全体の序章でありまして、そこではパスカルは、これまで述べたことを要約する

とともに、以後の展望を示しております。

つづくいくつかの章は、キリスト教の証明の、いわば準備のためのものであります。まず第12章「始め」でありますが、ここには「賭け」について触れた断章がいくつか見られまして、パスカルの有名な「賭け」の論理は、恐らくこの章に入るはずであったと思われますが、その「賭け」についての有名な長い断章（第418番）に、Vous êtes embarqués. という言葉があります。つまり宗教を信じるかどうかは、人間が必ず真剣に考えなければならない問題であって、無関心は許されないのである。なぜならば「あなたはもう船出をしている」、もうすでに今、人生を生きている。そのなかで、信仰に無関心なままに、怠惰に生きるのは、もうすでに神が無いほうに賭けていることになるのだ。だから真剣に考えなさい、求めなさい。これには永遠の生命が掛かっているのですよ、という意味ですが、これはまた、この章全体の骨子であるとも考えられます。いいかえると、人間にとって、この問題を探求することの「必然性」を説く章である、といってよかろうと思われます。

つぎの第13章「理性の使用と服従について」と、第14章「この証明の卓越性」は、探求の「手段」についての考察でありまして、パスカルによりますと、理性という手段は不十分、不完全である。なぜなら理性には限界があり、自然の研究についても充分ではない。ましてや超自然的な事柄については、理性は無力で役に立たないものである。このような事柄については、イエス・キリストによる方法、すなわち聖書による方法のみが有効であり、優れているのだということを示す部分であります。

そして、つぎの第15章「人間の認識から神への移行」は、有名な「二つの無限」を扱う長い断章（第199番）と、「考える葦」の断章（第200番）と、「無限の宇宙の永遠の沈黙は私をぞっとさせる」という、これまた有名な断章（第201番）が踵を接して登場する、豪華な章でありますが、この章の骨子はと申しますと、人間は、その理性だけでは人間と宇宙を理解することも出来ないし、ましてや世界の「意味」、自分が世界に存在する「意味」を知ることは、とうてい出来ないのだということを再確認した後に、しかしこの不可解な世界にも、神が残した「何らかの印」（ラフュマ版第198番）があるだろう。それを求めてみよう。それこそが、「よく考える」ということなのだ、と結ぶところにあろうかと思われます。

この第15章のつぎに目次では、もう一つの第15章「自然（本性）は堕落している」が置かれています。これは実は表題だけで、中身のない章でありまして、いろんな解釈があるのですが、中身が無いということもあり、ここでは、これ以上触れないことにいたします。章の数を27といったり、28といったりしたのは、これを数えるかどうかの違いです。

そうして、つづく第16章「他の宗教の虚偽性」、ここでは、キリスト教以外の宗教、とくにイスラム教が槍玉にあげられ、そのつぎの第17章「愛すべき宗教」では、キリスト教のみが「愛すべきもの」であることが、もう一度再確認されます。

そしてつぎの第18章以下で、はじめて本来の意味でのキリスト教の証明に入ります。その最初の二章、すなわち第18章「宗教の基礎」と第19章「律法は表徴的であった」がいわば総論で、つづく六章、すなわち第20章「ラビ文書」、第21章「永続性」、第22章「モーゼの証拠」、第23章「イエス・キリストの証拠」、第24章「予言」、第25章「特殊な表徴」、この六章は、細かい各論といえます。ここでは細かいことは省いて、そのエッセンスのみを要約しますと、パスカルによればキリスト教が真実である理由、その真理性の「基礎」は、重要なものとして、少なくとも二つあります。

一つは聖書の信憑性であります。すなわちキリスト教の教えの根幹は、アダムの原罪と、その結果としての人間の堕落、これを救うための救世主の到来の予言、そしてイエス・キリストの到来による、この予言の実現でありますが、これらの事柄が、すべて書かれてあるのが聖書である。そうしてパスカルによれば、これら聖書に書かれた事柄は、すべて確かな真実であるという、そういう主張であります。そしてまたパスカルは、とくに原罪と救世主の待望については、これを聖書以外の文書やユダヤ民族の歴史からも証明しようとしております。

キリスト教の真理性のもう一つの「基礎」は、聖書は「表徴的に」読まなければならないという原則であります。すなわち、いま聖書に書かれた、数々のキリスト教の教えを列挙しましたが、実は、聖書をこのように読むためには、聖書を「表徴的に」読まなければならないのだということであります。「表徴」Figureとは、パスカルの書いたものに若い頃からよく出てくる言葉でありまして、目に見えるものだが、そのうしろにそれとよく似た、目に見えないものを隠している、そういうものを「表徴」と申します。そして聖書を「表徴的に」読むとは、聖書の言葉を字義通りに取らないで、その裏にある精神的、霊的な意味を読み取るということであります。

ところがパスカルによれば、ユダヤ人は聖書をこのようには読まないで、全く字義通りに、「肉的に」読んだために、神が約束した善きものとは地上的な幸福であると考え、また予言によって自分達を救いに来る救世主とは、地上の輝かしい、偉大な王であると考えた。そしてそのために、救い主イエス・キリストが世に現れたときに、これを救世主とは認めなかったのである。しかしながら聖書を、特に旧約聖書を「表徴的に」読めば、そのすべては、今述べたキリスト教の教えを表しているのであるというのがパスカルの考えであります。

それでは、なぜこのように聖書を「表徴的に」読むことが許されるか、というよりも、なぜ聖書をこのように読まなければならないかといいますと、これはパスカルの「隠れたる神」という、大へん奥深い思想からきており、それはまたジャンセニスト的な考えともつながるものだと思われますが、パスカルによれば、神は人間を、まったき暗さのなかにも、またまったき明るさのなかにも置かれないで、適度の暗さと適度の明るさのなかに置かれた。それは何故かというと、真剣に神を求める人に、何の印も見えないほどの真っ暗やみのなかに、人間を打ち捨ててておくならば、絶望に走ることになり、救われる人はいなくなるだろう。また

反対に、この真理が誰の目にも明らかな、明々白々たるものであるならば、信じるということには何の価値もないことになってしまう。それにまた信仰は、そのように理性ですべてが明らかだというようなものではなく、なによりも心の問題であるからだというわけであります。

以上の二つ、すなわち、(1) 聖書に書かれている事柄は、すべて真実である。(2) 聖書は字義通りの意味でなく、「表徴的に」読まれなければならない。これがパスカルによれば、キリスト教の真理性の証明の基礎であり、これをさらに詳しく細部にわたって展開したのが第 20 章から第 25 章までの六章であります。

つぎの第 26 章は「キリスト教の道徳」と題され、これはこれまでの証明の補足、あるいは確認でありまして、その骨子は、真のキリスト教の信者の清らかな、正しい生き方を見れば、このように生きよと教えるキリスト教の正しさが、よく分かるだろうということであろうと思われます。

そして最後の第 27 章は、「結論」でありまして、ここには、「神を知ることから、神を愛することまでは、いかに遠いことだろうか」という有名な断章（第 337 番）が置かれていますが、その断章が示す通り、ここでは「アポロジー」というものの限界を示し、ここまで導かれてきた人に、今後の、さらなる努力を呼び掛けることで、この「アポロジー」全体が終わることになります。

以上が、パスカルの構想した『キリスト教のアポロジー』という作品のあらましであろうかと思われます。そしてこのような構想が、パスカルの同時代、あるいはそれ以前のキリスト教弁護論には全く見られない、全くのパスカルの独創だということは、すべて研究家の一致して認めるところであります[14] から、われわれは安心して、その背後にあるリベルタンの思想を、この『アポロジー』を通して考えてみることが出来るわけであります。では最後に、余り時間が無くなりましたが、この『アポロジー』のプランの背後に透けて見えるリベルタンの姿とは、どのようなものであろうかを、考えてみようと思います。

五　パスカルの『アポロジー』の背後のリベルタン

そこで、この『アポロジー』のプランをもう一度見てみますと、まず前半の人間論では、一見して明らかなように、人間の「偉大」に比べて、人間の「悲惨」の方が随分強調され、細かく述べられていることが分かります。詳しくは申しませんが、章の数だけ数えても一対四で、一目瞭然であります。これは何を意味するかと申しますと、実は『パンセ』には、パスカルの友達で、「オネットム・リベルタン」のミトンという人の名前が三度も登場して、ほかにはこんな例はありません。しかも、有名な断章ですが、「自我は憎むべきものなんだよ、ミトン君」と、ミトンにたいする直接の呼びかけまで聞かれます（第 597 番）。このことが、『パンセ』は「オネットム・リベルタン」を対象にしているとされる大きな理由の一

14）これについては下記を見よ。J. Dedieu, « Survivances et influences de l'apologétique traditionnelle dans les *Pensées* », *Revue de l'Histoire littéraire de la France*, 1930, pp. 481-513 et 1931, pp. 1-39 ; Julien Eymard d'Angers, *Pascal et ses précurseurs*, Nouvelles Éditions Latines, 1954.

つですが、実はミトンは、エピキュリヤンの、賭け事の名人で、人生のあらゆる快楽を味わい尽くして、その結果、人間の悲惨を感じ、人生に絶望しているニヒリストと考えられております。そしてまた、パスカルの理解したようなモンテーニュも、このミトンと同一線上にあると思われるのでありますが、もしこのミトンたちがこのような人間であったとすれば、そんな人に人間の「悲惨」を強調する必要は全く無いわけで、むしろかれらには、人間と人生にたいする絶望から救うために、人間の「偉大さ」をこそ力説すべきであろうと思われます。『サシとの対話』のなかで、パスカルが述べている通りであります。にもかかわらず、ここで人間の「偉大」のほうは比較的軽く扱われ、人間の「悲惨」のほうが力説されているということは、この『アポロジー』がミトンやモンテーニュに向けられたものではなく、むしろ人間の「偉大さ」を確信している人に向けられたものではないか、というふうに考える理由を与えるものだと思われます。

つぎに、人間の「偉大」を論じる章のなかでは、前述のように、考えること、知ること、意識することの偉大さが強調されているのでありますが、その章が一章しかなく、比較的軽く扱われていることから見ますと、この『アポロジー』の相手は、考えることの偉大さは、教えられなくても充分知っている人であったということを意味するのかも知れません。

つぎに、今度は『アポロジー』の後半を見ますと、そこには、先に申しましたように、第13章として、理性の限界を論じる章が置かれている上、さらに第15章「人間の認識から神への移行」の章において、人間の認識の全面的な否定、批判がなされております。このことと、これまで述べたこととを考え合わせますと、パスカルの相手のリベルタンは、理性の力を高く評価し、理性によって信仰の問題をも論じようとする理性主義者ではないかという印象を、一層強くします。

そして、こういう理性主義者が、理性でもって、キリスト教や聖書の批判をすればどうなるだろうかということをうかがわせるのが、『アポロジー』のプランの後半の第18章から第25章でおこなわれる、キリスト教の証明の部分であります。つまりここは、『アポロジー』の、いわば本論でありますが、それを読みますと、その背後に、相当に激しい広範な聖書批判が随所に見て取れるわけでありまして、そのことを、つぎに、簡単にお話ししたいと思います。

すでに申しましたように、パスカルによるキリスト教の証明には、大きな二本の柱がありまして、その一つが、聖書に書かれてある事柄は、絶対に確かな真実だということであり、これに大きなウエイトが置かれていますが、『パンセ』のその部分を見ますと、まず旧約聖書についてですが、例えば、つぎのようなパスカルの主張が何度も出てまいります。すなわちモーゼが書いたとされる旧約聖書の最初の5冊、「モーゼ五書」には、天地創造や、アダムの原罪や、ノアの洪水など、大へん重要な記述が含まれておりますが、パスカルによれば、これらはすべて真実である。なぜかというと、昔のユダヤ人は長命であった。そしてそのために、アダムからモーゼまで、年数は長いけれども、世代の数は少なかったので、次々と口移しに、直接に、間違いなく伝えられたのだ。だから、これらの物語は、す

べて真実であるという主張であります[15]。こういうパスカルの主張の背後には、旧約聖書の古い物語、すなわちモーゼより何千年も前に起こったとされる物語が、正確に、誤りなく、モーゼまで伝えられたはずがない。必ず時と共に、その伝承には、さまざまな改変、追加、省略がなされたはずだとする聖書批判の存在がうかがえます。

さらには、『パンセ』には、この伝承を伝えられたモーゼが、勝手に取捨選択もせず、隠しもせず、そのまま記述したにちがいないという主張があります[16]が、その背後には、テクストの作者の公平さや、その記述の客観性に対する、リベルタンたちの疑惑の存在がうかがえます。

さらにはまた、ここまでで疑わしいとされていた事実は、主として天地創造とノアの洪水でありましたが、そのほかに、モーゼの行ったとされる「奇跡」に対する疑いを予想させる断章もあります[17]。

このように、『パンセ』の断章を読みますと、その背後に、旧約聖書に記述された物語の真実性と、それを記述するテクストの信憑性に対する批判――そして、あとの方には、伝承がテクストの作者まで正しく、正確に伝えられたかどうかという問題と、作者がそれを正しく、そのまま記述したかどうかという問題が含まれますが――こういう相当大掛かりな批判の存在が見て取れるように思います。

つぎに新約聖書についてでありますが、その中に記述された事柄のうちで、一番問題にされていたらしいのは、処女懐胎とキリストの復活でありまして、それを弁護する断章がいくつも見られます[18]。とくに復活に関しては、キリストの弟子達が詐欺師で、密計を凝らして、キリストが復活したことにしようとたくらんだ、などということはありえないのだという主張が何度も繰り返し出てまいります[19]。

---

15)「族長たちの寿命が長かったことは、過去の物語を失わせるどころか、かえってこれを保存するのに役立った。なぜなら人が先祖の物語をあまりよく知らないことがあるのは、かれらとともに長く生活しなかったからであり、人が物ごころつく年ごろになるまでに、かれらが、たいがい死んでしまっているからである。しかるに人々が非常に長命であった当時は、子供たちも長いあいだ、その父祖たちとともに生活した。かれらは長いあいだ、互いに語り合った。そんなときかれらは、先祖の物語のほかに、何を話したであろうか…」(第 290 番)。「セムはレメクを見、レメクはアダムを見たが、そのセムはまたヤコブを見、ヤコブは、モーゼを見た人たちを見た。それゆえ大洪水と天地創造は真実である。このことは、それを十分に理解している人々のあいだにおける結論である」(第 296 番)。ほかに第 292 番、第 392 番、第 436 番を見よ。

16)「ヨセフスは、その民の恥を隠す。
モーゼは自分自身の恥も…も隠さない」(第 295 番)。

17)「この上なく軽信な不信仰の徒。かれらはモーゼの奇跡は信じまいとして、ウェスパシアヌスの奇跡を信じる」(第 224 番)。

18) たとえば、「かれらは復活に反対し、処女降臨に反対して、何を言うことがあるのだろう。一人の人間、あるいは一個の動物を生むのと、それを再生させるのと、どちらがいっそう困難だろうか…」(第 227 番)。ほかに註 (19) を見よ。

19)「イエス・キリストの証拠。
　使徒詐欺師説は、まったくばかげたものである。この仮設を子細に辿ってみたまえ。これらの十二人のものが、イエスの死後集まって、イエスは復活したと、いいふらす策略を巡らしたとする。かれらは、そのことで、あらゆる権力と戦うことになる。人間の心は不思議なほど軽はずみで、変わりやすく、人の口車や金銭の誘惑に乗せられやすい。もしかれらのうちの一人が、そういう誘惑によって、いやそればかりでなく、さらに、牢獄や拷問や死によって、少しでも自分を裏切ったとしたら、かれらは破滅しただろう。このことをよく考えてみたまえ」(第 310 番)。ほかに、第 322 番。

その背後には、キリストの弟子達がペテン師だとするリベルタンの主張があることは明らかであります。なおこの「ペテン師」という批判について申しますと、中世以来「三人の大山師」という、有名なリベルタンの主張があります。すなわち世界の三大宗教の開祖であるモーゼとキリストとマホメットは、そろいもそろって大山師であるという説でありますが、ここには、この説の片鱗もうかがえるように思います[20]。

またキリストと同時代の歴史書に、この「復活」というような大事件や、その当事者であるイエス・キリストについての記述が全くないのも、その真実性を疑わせる証拠になる、そういう批判に答えたらしい断章もあります[21]。

さらには、四つの福音書の間の記述の矛盾という問題に触れた断章もあれば[22]、同じ種類の問題ですが、マタイ傳の中に書かれたイエスの系図と、ルカ傳の中の系図との矛盾を問題にした断章もあります[23]。つまり同じ事実を述べているはずの四つのテクストが矛盾するのは、真実が書かれていない証拠だという批判が予想されているわけであります。

このように、『パンセ』のこれらの章を読みますと、新約聖書のテクストや、その内容についても、相当大掛かりな批判があって、それをパスカルが熟知していたことが十分うかがえます。

最後にもう一つだけ申しますと、キリスト教の証明の二本の柱のうちの二本目の柱、つまり聖書の「表徴的な」読み方の方にも関連のあることですが、第 23 章「イエス・キリストの証拠」のなかに、「三つの秩序」を説明した有名な断章があります（第 308 番）。その意味は、この世には「三つの秩序」、すなわち上下に層をなす三つの世界があって、その最下層には、国王や、権力、富を持った人を頂点とする「肉の秩序」、その上に、アルキメデスを頂点とする「精神の秩序」、そして最も上には、キリスト教的な「愛の秩序」があり、それぞれの世界の間の距離は無限であって、下位の世界に属するものを無限に集めても、上位の世界の一かけらをも生み出しえないとする有名な考えでありますが、この断章のなかの、今述べたような一般論を記した部分の多くは、あとで付け加えられた部分でありまして、この断章の原形は、キリスト弁護論の色が大へん濃厚でありました[24]。そしてその部分を読みますと、キリストは、「肉の秩序」においては社会の最下層の、いやしい身分に属するけれども、「愛の秩序」のなかでは比類の無い存在なのだと

20）これについては下記を参照のこと。G. Couton, «Libertinage et apologétique : les *Pensées* de Pascal contre la thèse des Trois Imposteurs», *XVII*[e] *siècle*, 1980, pp. 181-195 ; Antony McKenna, *De Pascal à Voltaire. Le rôle des Pensées de Pacal dans l'histoire des idées entre 1670 et 1734*, The Voltaire Foundation, Oxford, 1990, 2 vol., pp. 635-645.

21）「世に埋もれたイエス・キリスト（俗世で「世に埋もれた」と呼ぶ意味での）は、国家の重大事しか記録しない歴史家たちの目には、ほとんどとまらなかったほどである」（第 300 番）。

22）「四福音書のあいだの外見上の不一致」（第 318 番）。

23）「…このように、きわめて明白な弱点さえも、すべて強みになる。例、「マタイ福音書」と「ルカ福音書」の二つの系図。これらが、照合して作られたものでないことは、何より明白ではないか」（第 236 番）。

24）たとえば、テクストの最初の段階においては、三つの秩序の存在は語られるものの、秩序の間の距離は無限であること、下位の世界に属するものを無限に集めても、上位の世界の一かけらも生みだしえないことなど、この思想の最も特徴的な部分は見出されない。

いう、キリストの弁護が中心になっております。このような弁護の背景としては——私はキリストのブルジョア的批判と呼んでいるのでありますが——社会の上層部にいて、信仰を持たない人たちらしい、キリスト蔑視の考えの存在することが、鮮やかに見て取れます。18 世紀のヴォルテールなどが、しばしば口にするものでもありますが、そういうキリスト批判がうしろに隠れているように思われます。

このように、『パンセ』から読み取れるキリスト教批判、聖書批判は、相当に大掛かりで、幅広いことが想像されます。これは予想外のことでありまして、といいますのは、このような聖書批判が大々的に展開するようになるのは、17 世紀末から 18 世紀にかけて地下で書かれ、筆写され、流布した地下文書のなかでありまして、私などは、これが地下写本群の思想の大きな特徴の一つだとさえ考えておりました。というのは、それ以前の 17 世紀には、少なくとも書き物として残ったもののなかには、このような聖書批判はほとんど全く見られず、せいぜい「マリアは売春婦で、ヨセフは女衒だ」という、ざれ歌のたぐいだったからであります。そして聖書批判が人目を驚かすようになったのは、フランスでは、パスカルの死後の 17 世紀後半の、スピノザやリシャール・シモンの仕事以後のことだと思われていたからであります。だから、これは大へん予想外のことでありました。

以上のようなものが、『パンセ』、すなわち『キリスト教のアポロジー』の背後に、少なくとも 1658 年頃の『アポロジー』の構想の背後に、もっとも色鮮やかに浮かび上がるリベルタンの姿と思想であります。すなわち人間の「悲惨」を否定し、人間は信仰を持たなくとも、毅然と生きることが出来ると確信し、理性でもって宗教の問題をも処理し、聖書をはじめ、キリスト教を鋭く批判する人たちであります。ではこれが、17 世紀に生きていた、どういうタイプのリベルタンに対応すると考えられるかといいますと、まずさっきお話しした「人文学者リベルタン」の線も、依然として消えていないように思われます。とくにキリスト教の批判や、広範な聖書批判を見ると、その感を強くいたします。

つぎに、いや、やはり「オネットム・リベルタン」だとするならば、ミトンやメレのようなこの「オネットム・リベルタン」が、普通言われている以上に、はるかにラショナリストで、そして聖書批判を相当に詳しく、深く考えた人たちではなかったか、ということになろうかと思います。

最後にもう一つ、このようなリベルタンが考えられはしないだろうかという提案をいたしますと、それはデイスト、理神論者であります。デイストは、17 世紀の始めに話題になった『デイストの四行詩』という写本の作品がありまして、これに対して、メルセンヌが一千ページ余りの本を書いて、逐一反論したのは有名な話でありますが、その後は、17 世紀末までは、文献にはほとんど見られなくなってしまっておりました。それで私も、かつてリベルタンのグループ分けをしたときに、一つのグループを立てるほどには重視しなかったのでありますが、たとえば 17 世紀中頃の人で、ブーリエという神父の書き残した『覚え書』によりますと、神は認めるが、それは宇宙を創造し、支配する神であって、キリスト教の

説くような人格神ではない。聖書は作り話の集まりで、天国も地獄もないのだ。また個人の霊魂も、死とともに滅びるのだ。また、宗教は人民統御の政治的手段にすぎず、キリストも、モーゼやマホメットと同様の大山師なのだ。こういうふうに考えるデイストが、パリだけで二万人もいたと申します[25)]。しかもブーリエは、パスカルの臨終に立ち会った神父でもあります。このようなデイストが、『パンセ』の背後に見られはしないか、という気もいたします。ただし、一つひっかかることがありまして、それは、理神論者は、すでに神を認めているのだから、そういう人に対して、パスカルの「賭け」が必要だろうかということでありますが、この問に対しては――ここでは、これ以上は申しませんが――何か抜け道もあるのではないかと思っています[26)]。

ところで、このようなデイストがフランスで目立ち始めるのは、さっき申しましたように、パスカルの死後の 17 世紀末のことであり、その主な活躍の舞台は、もちろん 18 世紀であります。したがって、もし『パンセ』が、このようなデイストをターゲットにしていたとすれば、『パンセ』の射程は、普通考えられているより、はるかに広大なものだということができ、『パンセ』が 18 世紀に、とくに目の敵にされた理由は、こういうところにもあったといえるかもしれません。

いずれにしましても、この問題は、一朝一夕に解決できるような問題ではなく、文献にはなかなか現れない歴史の深層にまで分け入って、調査し、吟味しなければならぬ問題であろうと思われます。なお今後考えていきたいと思っております。

［付記］本稿は、1991 年 1 月 18 日、大阪大学文学部でおこなった最終講義の原稿に、若干手を加えたものである。本稿のこのような性質上、註記も必要最小限のものにとどめたことを付記したい。

25）Antoine Adam, *Les Libertins au XVIIe siècle*, Buchet/Chastel, 1964, p. 110 sqq.

26）ここでは、次の点を指摘するにとどめたい。すなわち、ここで、その存在を問題にされているのは、デイストの、匿名の、抽象的な神であるよりも、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」、「イエス・キリストの神」、直ちに生き方を変え、キリスト者の生活に入ることを命じる神であること、したがって、パスカルによれば、「理神論は、キリスト教とかけ離れている点では、その正反対である無神論と、ほとんどかわらない」（第 449 番）ものであること。